

〈書評〉

橋本陽介著『中国語における「流水文」の研究』東方書店、2020年刊行、252pp.

単 艾婷

## 要旨

本稿は、橋本陽介(2020)『中国語における「流水文」の研究』(以下、本書)の書評である。流水文は中国語に特有な文であり、中国国内では数多くの研究がなされているが、日本ではあまり注目されておらず、日本語文との比較もほぼ皆無と言える。本書は、欧米言語の「従属節―主節」の階層的構造という従来の複文分析方法が、中国語の複雑な文には適用できないとする立場から、中国語文自体の観察を通してその形成方法や特徴を詳細に分析・考察したものである。その結果として、中国語の長く複雑な「一つの文」が、比較的独立した節が並ぶ「連続構造」をとることを明らかにした。本書は理論研究や対照研究のみならず、言語教育の分野にも新たな知見を提供しうるものである。本稿では、本書の概要をまとめた上で、本書の貢献や意義、今後の展望について述べる。

### 1. はじめに

本書は、中国語小説などの書き言葉に多く見られる、長く複雑な「一つの文」である「流水文」に着目し、言語学的・修辞学的な観点からその形成方法や特徴を明らかにしたものであり、全七章より構成される。以下、本稿第2節では本書の概要を紹介する。具体的には、2.1では本書の構成について、2.2では流水文と連続構造について、2.3では流水文とその修辞的特徴について、2.4では流水文と現代日本語の比較について、2.4では流水文の通時的变化について、それぞれ整理する。第3節では本書の結論と貢献、第4節では本書の意義と今後の展望について述べる。

## 2. 本書の概要

### 2.1 本書の構成

本書の目次は、以下の通りである。

序

第一章 「流水文」の先行研究と連続構造

第二章 時間軸に沿って継起的に起こる出来事と連続構造

第三章 性質・状態性叙述の標点節を含む連続構造

第四章 判断、説明、評価と連続構造

第五章 「流水文」とその修辞的特徴

第六章 日本語の「長い文」の規範

第七章 歴史的経緯素描

付録 現代中国語における“是”の文脈における機能

## 結論

「序」では、まず中国語（特に書き言葉）における「句点から句点までの単位」としての「一つの文」の形式が、日本語や英語等の他言語に比して特殊であるという問題提起が、中国語小説中の実例を示しながら翻訳文との比較対照を通して行われる。次に「一つの文」の定義について、先行研究を概観しながら整理される。続いて「流水文」の概念や特徴、その分析の切り口や関連する重要概念が紹介される。本書において流水文の特徴は「多くの節からなる複雑な複文であり、その節と節の結びつきが比較的弱く、接続表現なども用いず、たいていの場合多くの主語を持つもの」として紹介されている（本書 p.6）。

本書は、欧米言語の「従属節—主節」の構造を前提とする従来の複文研究の枠組みにおいては、流水文に代表される中国語の複雑な文を明らかにできないと指摘した上で、Givón (1997) が提起する「連続構造」(serialization)、つまり「埋め込まれることなく比較的独立した節が次々に付加されることによって複合的な観念を表す構造」(本書 p.7) という概念を基盤とする新たな枠組みを構築することにより、先行研究の問題点を克服し、流水文のメカニズムを解明する端緒を拓いた。最後にこれまでに展開された問題提起を総括する形で、流水文に対して多角的にアプローチすることを意図して組まれた本書の構成および、各章での議論の要点が述べられる。

「第一章」では、流水文に関する先行研究の概要と本書における分析上の重要概念である「連続構造」について紹介される。まず、中国語の複文に関する先行研究が概観され、それらの研究の中で、中国語における複文は、論理的なつながりを持つ2つ以上の単文が結びついてできた文として定義されることが多いと述べられる。次に、従来の2つの節間の論理的関係に注目した分析方法が、中国語の複文、特に流水文を分析する際には不十分であることについて述べられる。その理由としては、次の2点が挙げられる。

- (A) 中国語の複文には節間の論理関係が明確でないものが多く見られる
- (B) 中国語の複文における読点・句点は、両者の機能が重複する場合が多く、使い分けの基準が明瞭でない

最後に先行研究を参照しつつ流水文の構造について説明がなされる。本書では先行研究において一般化された「 $SP_1 + SP_2 + SP_3 \cdots SP_n \circ$ 」という複文形式を、流水文の基本的な構造モデルとして援用しつつ、先行研究では未解決であった以下2点に関する議論をさらに前進させることにより、流水文の構造のより詳細な記述を試みている。

- i 「 $SP_1 + SP_2 + SP_3 \cdots SP_n \circ$ 」が全体としてどのようなまとまりをなしているのか
- ii 「 $SP_1 + SP_2 + SP_3 \cdots SP_n \circ$ 」における SP 間の関連

また、この議論においては、Givón (1997) が提起した文法的複雑さを得る手段である「連続構造」と「埋め込み構造」の2種類のモデルのうち、前者が流水文の構造をより適切に説明可能なものであるとして援用される。なお、埋め込み構造とは「連体修飾・連用修飾

構造や、関係節などの従属構造を使うもの」である（本書 p.26）。

## 2.2 流水文と連続構造

「第二章」から「第四章」では「連続構造」の観点から、流水文がどのような構造を有しているのか具体的に分析・考察がなされる。主として以下の3パターンに着目したアプローチが行われる。

- ① 時間軸に沿って継起的に起こる出来事と連続構造
- ② 性質・状態性叙述の標点節を含む連続構造
- ③ 判断、説明、評価と連続構造

「第二章」では、時間軸に沿って継起的に起こる出来事と連続構造について分析・考察が行われる。中国語の連続構造における「一つの文」の1つ目の形成方法を次のように示している。

### 【形成方法①】

中国語では主語が同一であろうと、途中で変わろうと、時間軸に沿って継起的に起こる出来事を連続させて「一つの文」として表すことができる。この時、「SP<sub>1</sub> + SP<sub>2</sub> + SP<sub>3</sub> … SP<sub>n</sub>。」の「+」は時間軸を表す。また、「SP<sub>1</sub> + SP<sub>2</sub> + SP<sub>3</sub> … SP<sub>n</sub>。」は一続きの出来事として書き手が表すまとまりである。（本書 p.34）

先行研究で指摘されるように、中国語では発生した動作が時間の流れに従う「時間順序原則」という重要な法則があるため、時間軸に沿って展開する出来事が一つの文となりやすい。そのうち、主語が切り替わる場合でもなぜ一つの文にできるかについて、本書では固定された空間のなかで行われる動作の連続であれば、複数の主体でも一つの文にすることができると説明されている。また、本書では一見これに違反する興味深い例についても言及されている。例文（1）では、時間順序に従うならば、弦を張り替えてから琴の音が響くはずである。しかしながら本書では、逆転に見えるのは現実の時間軸ではなく、視点人物の認知する時間軸に沿っていると解釈している。

（1）之后，琴声响了，老瞎子又上好了一根新弦。

やがて琴の音がひびいた。老盲人がまた新しい弦を張り替えたのである。

（やがて、琴の音が響いた、老盲人がまた弦を一本張り替えた。）

（本書（56）p.49）<sup>1)</sup>

本章の最後では、日本語小説を中国語に翻訳した例においても、上記の形成方法①の特徴が確認されることが述べられる。このような事例に基づき、中国語では時間軸に沿って継起的に起こる出来事が「ひとまとまり」を形成し、読点で繋げられる「一つの文」となる

という結論が導かれる。

「第三章」では、性質や状態性叙述の標点節を含む連続構造について分析・考察が行われる<sup>2)</sup>。中国語の連続構造における「一つの文」の2つ目の形成方法を次のように示している。

**【形成方法②】**

ある空間・人物の一時的状態や性質の描写が行われる場合、それ全体で「一つの文」にすることが多い。また、性質・状態を表す叙述が比較的独立した節として時間的展開のある出来事の叙述に統合され、「一つの文」になる。(本書 p.57)

ここではまず、人物と空間の叙述を表す連続構造の用例を取り上げ、それらは読点で繋がれ「一つの文」として表出されると述べられる。このほかにも、①「原因→結果」の順に叙述される構造、②「全体→部分」の順に叙述される構造、③隣接した順に叙述される構造、④接続詞・指示詞を使用しない手段で結束させる構造について、それぞれ例示しながら説明されている。①に関しては、例文(2)が示されている。例文中のaでは「みな」が山へ仕事をしに出かける準備をしていることが語られ、b,cは「みな」を形容する叙述となっている。このようにa,b,cの全体を通して「みな」の状態が叙述されており、これに引き続いてdではa,b,cを原因とする「私」の感情が描写され、さらにdの結果としての行動がeにおいて叙述されるという構造を有していることが分かる。中国語ではこのような「原因→結果」の連鎖が、読点で繋がれ「一つの文」として表出されることが多いとされる。

- (2) a 场上大家正准备上山干活, b 一个个破衣烂衫, c 脏得像活猴, d 我就有些不好意思, e 想低了头快走。

広場ではみなが山仕事に出掛けるところで、ぼろを着てまるで猿のようだった。「悪いなあ」と、下を向いて通り過ぎようとする、

(広場ではみなが山に登って仕事をする準備をしており、誰もがぼろをきて、猿のように汚く、私はすまないと思い、下を向いてそそくさと通り過ぎようとした。)

(本書(70) p.67、a-eの記号は評者より)

②「全体→部分」の順に叙述される構造に関しては、空間描写をする際に全体的・背景的な事柄を述べた後に、その部分的な事柄に焦点を当て叙述を展開していくという連鎖的な構造も、上記①の構造と同様に、人間の認知プロセスの一般的な傾向として理解できるのではないかと述べられる。③隣接した順に叙述される構造としては、伝統的な修辞学において「頂真」と呼ばれたものが代表として挙げられている。頂真とは例文(3)のように、空間描写をする際、先に叙述されたものの末尾部がその直後の叙述の冒頭部に置かれる、つまり、先に描写されたものを参照点として次の存在物を描写するという形成方法である。

(3) 然后就到二楼上。到了半层楼大的一方空地上。地上铺了红地毯，靠墙一边摆了一排布沙发，沙发对面像戏台样起了一尺高的木艺台，木艺台上有西木一样的大幕布。灯光是朦胧模糊的，神秘秘的红。

やがて二階についた。フロアの半分ほどの広さのがらんとしたスペースである。真っ赤な絨毯が敷かれ、壁際に布張りのソファがずらりと並び、ソファの向かいに舞台のような三十センチほどの高さの木製のステージがあり、そのステージの上には舞台の幕のような大きなカーテンがかかっている。

(本書 (86) p.83、下線は本文ママ)

④接続詞・指示詞を使用しない手段で結束させる構造は、中国語の小説などにおいて比較的多く出現する傾向があると指摘される。例文(4)を見ると、日本語では接続詞(「そして」)や指示詞(「その」)が使用されているのに対し、中国語では使用されていないことに気づく。

(4) ものごとは見かけと違う、と青豆は頭の中でその言葉を繰り返した。そして軽く眉をひそめた。

事物往往和外表不一样。青豆在脑中重复了一遍，微蹙眉间。

(本書 (108) p.95、下線は本文ママ)

本章の最後では、日本語小説を中国語に翻訳した例においても、上記の形成方法②の特徴が確認されることが述べられる。このような事例に基づき、性質や状態性叙述の標点節を含む連続構造が「ひとまとまり」を形成し、読点で繋げられる「一つの文」となるという結論が導かれる。

「第四章」では、語り手の判断・説明・評価と連続構造について分析・考察が行われる。中国語の連続構造における「一つの文」の3つ目の形成方法を次のように示している。

#### 【形成方法③】

中国語では説明、判断、評価なども時間軸に沿って継起的に起こる出来事や性質・一時的状態の叙述と統合されて「一つの文」となる。(本書 p.97)

本章では、まず断定を表す“是”や、“是”に似た働きをもつ“像”が使用された文が取り上げられる。例えば、小説などにおいて人物の行動の描写が行われた直後に「～である」のような断定的な判断、あるいは「～に似ている」のような類似関係に基づく判断が加えられることがあるが、このような場合も一文になりやすいとされている。この場合、例文(5)のように「AはBである」とまず述べてから「(そのAが)Bする、Cする」と連続させることもあれば、例文(6)のように「AはBして、Cしているように、Dである」とまず出来事や状態について叙述し、その後、語り手の判断・評価・説明などを加えることもある。

- (5) 这个学生是个男娃，犹犹豫豫站起来，望望我，又望望黑板，又望望别的学生，笑一笑，说：

その男の子はもともと立ち上がると、ぼくを見てから黑板を見やり、ついで仲間を見て、にやりとし、(と言った)。

(この学生は男の子で、もともと立ち上がると、ぼくを見、また黑板を見、さらに別の学生を見て、にやりとし、言った。)

(本書 (114) p.99、下線は評者より)

- (6) 老浦扶着车子望了望昔日的喜红楼，喜红楼黑灯瞎火的，就像一块被废弃的电影布景。浦は車にもたれながら昔日の喜紅樓を眺めると、喜紅樓は灯火も消えて真っ暗で、まるで廃棄された映画のセットのようだった。

(本書 (121) p.103、下線は本文ママ)

このほかに、「詳細情報」「判断」「原因・理由」などの詳しい説明が後ろに継続され、ここまでで「一つの文」となる場合も挙げられている。また、連続構造に現れる名詞句についても分析が行われている(例文(7))。本書では、これらも形式的には「SP<sub>1</sub> + SP<sub>2</sub> + SP<sub>3</sub> … SP<sub>n</sub>。」と見なせると主張され、連続構造に含まれる名詞句はある種の陳述性を持っており、名詞句単独でPとして働くことと見なせるためであると理由付けがなされている。

- (7) 七八口人，十几个菜，关门在院内围桌吃着饭，日常间也和过年一摸样。

家族七、八人で、十数種類もの料理を、門を閉じた屋敷内の庭で食べるのは、日常でありながらまるで年越しのときと変わらないものであった。

(七、八人、十種類の料理、門を閉じた屋敷の庭でご飯を食べていると、日常でありながらまるで年越しのときのようなのだ。)

(本書 (146) pp.119-120、下線は本文ママ)<sup>3)</sup>

本章の最後では、日本語小説を中国語に翻訳した例においても、上記の形成方法③の特徴が確認されることが述べられる。このような事例に基づき、中国語では判断、説明、評価なども出来事や状態の叙述と統合され「ひとまとまり」を形成し、読点で繋げられる「一つの文」となるという結論が導かれる。

### 2.3 流水文とその修辞的特徴

「第五章」では、流水文とその修辞的特徴についての分析・考察が行われる。本章では、連続構造によって複雑な観念を表す際に、なぜ流れる水のように感じられるのかについて考察するにあたって、まず「流動する叙述」という修辞的特徴に着目している。例文(8)では、「行動a→行動b→行動c→行動cの形容d→dに対する判断e」のように文が流れていく。このcのような標点節は「連結機能を持つ中間節」と呼ばれるものであり、本章では例文のような文章において叙述が流れていくように感じられる要因が、この「連結

機能を持つ中間節」にあると結論付けている。

- (8) a 姑娘们就怔怔望着胡乡长, b 又彼此看了看, c 便重又散到那市里, d 花花绿绿, e 像一片开在市街上的花。

(娘たちはぼかんとしたまま胡郷長を見つめ、お互いに顔を見合わせると、再び市内に散って行った、色とりどりで、市の通りに咲いた花のようであった。)

(本書 (171) pp.135-136、a-e の記号は評者より)

本章ではこのほかに、「前置詞句と流動」や「動きのある描写」についても取り上げられている。また、伝統的な修辞学における頂真構造と結束性との関係についても詳しく紹介される。具体的には、空間描写の例、関連する名詞への展開、時間的展開、動詞などを反復する方式などが取り上げられている。なお頂真とは、第三章でも紹介されているように「末尾の位置で新情報として出したものを、続く節での話題として提示していく方法であり、「A は B、B は C、C は D…」の形で連ねていくもの」を指す (本書 p.154)。例文 (9) は頂真構造を用いた空間描写の例である。

- (9) 他们走到了一座木桥前, 桥下是一条河流, 河流向前延伸时一会儿宽, 一会儿又变窄了。青草从河水里生长出来, 沿着河坡一直爬了上去, 爬进了稻田。

(彼らは木の橋の前まで来た、橋の下は川で、川は前に向かって伸びるときにしばらく広くなると、またしばらく狭くなった。青草が川から生え出してきて、土手に沿って這い上がっていき、稲田に入った。)

(本書 (189) p.155、下線は本文ママ)

上記のような頂真構造を用いた修辞的な特徴からも分かるように、中国語では要素が並列的に並んでいく連続構造をとることが多く、前に出てきた要素に対してその後ろに新しい要素が付け加えられていく。本章では、このような修辞的要素が中国語の文章を「流れる水のように」に感じさせる一つの要因であると指摘している。

## 2.4 流水文と現代日本語の比較

「第六章」では、中国語の「一つの文」を日本語の「一つの文」に翻訳しにくい原因についての分析・考察が行われる。また、現代日本語小説における「長い文」がどのような構造を持つのかについても検討される。まず日本語の複文に関する先行研究が概観され、日本語では節を単に並列させるのではなく、何らかの論理的関係を明示し、「従属節—主節」の関係で結びつけることによって「長い文」が作成されることが指摘される。このことは、日本語のほとんどの文は「前件+後件」に分けることができ、基本的に「A すると、B した」「A だが、B した」「A なので、B した」などの関係で結ばれるということを意味する。

次に、時間軸に沿って継起的に発生する出来事の叙述や、恒常的性質や一時的状態を表

す場合において、日本語の「一つの文」がどのように表現されているのかについて観察される。その結果として、先行研究でも指摘される通り、日本語では連続構造よりも埋め込み構造が好まれる傾向にあると結論付けられている。本章ではまた、日本語の「長い文」の規範にかなっていれば、たとえ長い文であっても読みにくくはないということも指摘される。本章ではこの好例として、日本語としてかなり長い「一つの文」を書く作家である太宰治の『斜陽』が挙げられている。一方で、「長い文」の規範にかなっていない場合は読みにくいと述べられる。この好例として野坂昭如の『火垂るの墓』が挙げられている。

## 2.5 流水文の通時的変化

ここまで紹介してきた本書「第二章」から「第六章」では、主に1980年代以降に書かれた小説を対象とし、流水文に関する共時分析が行われている。「第七章」では、現在の標点符号の規範の導入が開始された1920年代の資料を取り上げ、「一つの文」の形成方法の通時的な側面についての言及がなされる。具体的には、『新青年』に掲載された魯迅の「狂人日記」「薬」や、1921年頃の『小説月報』に掲載された葉紹鈞の「母」での用例、そして古典作品の『三国志演義』や『紅樓夢』における新式標点の付け方などについて観察され、分析が行われている。その結果として、1920年代の資料においては、主語の切り替わりに伴う句点の使用がやや多い、また現在では読点が使われる箇所に「；」が多用されるといった違いは見られたものの、20年代の文章は80年代以降のものと比較してもそれほど大きな違いが見られないということが明らかにされた。本章ではこの分析結果を受け、新式標点について、導入が開始されてから比較的早くに定着したのではないかという見解が示される。

## 3. 本書の結論と貢献

「結論」では、本書のまとめと言語学へ提供しうる新たな知見について述べられる。本書は、中国語における長く複雑な「一つの文」とされる単位を観察・分析し、多くの場合それが埋め込み構造ではなく、比較的独立した節が並ぶ連続構造をとることを明らかにした。本章では、本書が言語学へ提供しうる新たな知見として、以下の4点が挙げられている。

まず、本書で取り上げた「節の並べ方」には、人間の認知システムのはたらき関わっていると考えられ、認知言語学へ新たな知見を提供しうる。

次に、これまで世界のSVO言語において中国語だけが前置修飾とされてきたが、実際には、連続構造をとるという形で後置修飾も持てるということが明らかとなった。これにより、中国語以外の連続構造をとる言語に関しても、分析を行う際に欧米言語の「従属節—主節」「埋め込み構造」の枠組みに囚われることなく、より相応しい形で捉えられることが期待され、言語類型論へ新たな知見を提供しうる。

それから、本書は中国語の「一つの文」とは何か、そして「一つの文」同士がどのように結びついているのかを詳細に検討しており、「文」を前提として分析するテキスト言語

学へ新たな知見を提供しうる。

また、本書は書き言葉の文法論を中心としたものであるが、中国語の修辭的側面にも言及しており、文法論と修辭を結びつける可能性を示した。

#### 4. おわりに

本書は、欧米言語の「従属節—主節」の階層的構造という従来の複文分析方法が、中国語の流水文には適用できないと指摘した上で、中国語文自体の観察から出発し、その形成方法や特徴を詳細に分析・考察したものである。沈（2017）は、欧米言語（とくに英語）において「文」の研究といえば「文法」に関するものがほとんどであるが、中国語では「文法」よりは「語用・修辭」に関するものであって、中国語の「文」は「文法」と「語用・修辭」が切り離せないと指摘する。しかし、これまでの先行研究は「文法」の観点からの分析がもっぱらで、「語用・修辭」の観点からの分析はほぼ皆無といえる。本書は、「文法」の分析にとどまらず、「語用・修辭」の観点も採用したため、中国語の「一つの文」の形成方法や特徴をより正確に捉えることができたのではないかと考えられる。

次に、中国語の「一つの文」とは何か改めてその定義について考えた点や、なぜそうなっているのかについてその修辭的特徴から詳細に論じた点から、流水文の形成方法とメカニズムの一端を明らかにしている。さらに、翻訳テキストや現代日本語との比較を通して、上記で明らかにした流水文の形成方法やメカニズムに関する検証が非常に説得性を持たせている。また、本書は共時的な分析のみならず、通時的な面にも言及したことで、流水文の形成方法や特徴の変化を示すことができた。これによって、流水文に対するより全面的な考察ができたのではないかと考えられる。

最後に、本書で得られた示唆が中国語の長く複雑な「一つの文」に関する理論研究や対照研究を発展させたことは無論であるが、言語教育にも重要な知見を与え、とくに日本人中国語学習者や中国人日本語学習者の長文理解や産出にとっても役立つものであると思われる。評者は以前、「なぜ中国語のエッセイや小説の一文はこんなに長いのですか？」と学習者に聞かれたことがある。また、「文章をどこで区切ったらいいか分からない」「主語が変わっても、同じ文になっている」「日本語では一文にするのが難しい」といった声もよく耳にする。このような学習者の悩みに応えることを目的として、単（2022）は本書の内容に基づき、中国語の長文構造に対する読解と作文の手引きを作成し、紹介している。

今後の展望としては、次の2点に関するさらなる検討が期待される。1つ目は、本書では流水文が主に連続構造によって形成されるという結論を導いているが、それ以外の特徴も考えられるため、別の角度からの分析も求められよう。例えば、沈（2012）は流水文に“并置性（juxtaposition）”と“指称性（referentiality）”という2つ重要な特徴があると述べている。“并置性”は、本書の「連続構造」と似た特徴を持つものであるが、“指称性”は、本書でも取り上げられた「名詞句」がなぜ「動詞句」と同様に節として並列することが可能かということを説明するものである。

また、王・趙（2016）は、流水文に“块状性（chunkiness）”“离散性（discreteness）”“可

逆性 (reversibility)”といった特徴があると述べている。“塊状性”も本書の「連続構造」と似た特徴を持つものであるが、“离散性”は接続表現を使用せず、主語のかかる範囲が節を跨いだり、節同士の結びつきが比較的弱いという特徴を説明するものである。“可逆性”は、節と節を交換しても文全体に影響を与えないという特徴を説明するものである。さらに、趙・王 (2020) は、英語との比較を通して、英語が強い「時間性 (temporality)」を持つのに対し、中国語は強い「空間性 (spatiality)」を持つと主張している。

2つ目は、流水文形成のメカニズムについてさらに検討する余地があると思われる。つまり中国語はなぜ連続構造を好むか、日本語はなぜ埋め込み構造を好むか、また中国語と日本語の特質上の理由や中国人と日本人の思考方式からの分析も必要であろう。

#### 注：

- 1) 用例の日本語訳について、( ) が付いているものは著者自身によるもので、( ) が付いていないものは翻訳小説によるものである。なお、用例の詳細な出典は本書を参照されたい。
- 2) 本書では「一つの文」の中で「句点から読点まで」「読点から読点まで」の単位を「標点節」と呼んでいる。
- 3) 著者の日本語訳「十種類の料理」は少々正確さに欠け、より正しい訳は「十数種類の料理」であると思われる。

#### 参考文献

- Givón, T. (1997) *Grammatical Relations: a functionalist perspective*, John Benjamins Publishing company.
- 单艾婷編著 (2022) 『中国 ことばの世界を旅する —陳謙 <冰箱里的企鵝>』朝日出版社
- 沈家煊 (2012) 《“零句”和“流水句”-为赵云任先生诞辰 120 周年而作》《中国语文》5, pp.403-415.
- 沈家煊 (2017) 《<繁花> 语言札记》二十一世纪出版社
- 王文斌・赵朝永 (2016) 《汉语流水句的空间性特质》《外语研究》4, pp.17-21.
- 赵朝永・王文斌 (2020) 《汉语流水句与英语复杂句结构特性对比：英汉时空特质差异视角》《外语教学》41 (5) pp.27-32.